

閨怨
(王昌齡)

閨中の少婦愁を知らず

春日妝を凝らして翠楼に上る

忽ち見る陌頭楊柳の色

悔ゆらく夫婿をして封侯を覓めしめしを

閨中少婦不知愁
春日凝妝上翠樓
忽見陌頭楊柳色
悔教夫婿覓封侯

解説 夫の遠征している留守に、部屋を守る若い人妻が、柳を見て夫への思いにかられたさまを詠じた詩である。

語釈 ※閨Ⅱ女性の部屋。※少婦Ⅱ若妻のこと。

※翠樓Ⅱ婦人の住居を形容したい方。※晒Ⅱ道。

※頭Ⅱひとり。※夫婿Ⅱ夫。※悔Ⅱ後悔する。

※封侯Ⅱ大名になること。※覓Ⅱもとめる。

通釈 部屋の中の若妻は、何の愁もない。ある春日、お化粧を念入りにして、二階に上り、ふと路のほとりの柳が青々としているのを見て、急に夫が恋しくなり、夫に出征して手柄をたてて大名になって、と勧めたことを後悔している。